
慶祥の平和学習 II

— グローバルな視点とローカルな視点からの学び —

山口 太一

立命館慶祥中学校・高等学校教諭

1. はじめに

立命館大学国際平和ミュージアム紀要第15号(2014年3月)に続いて、立命館慶祥中学校・高等学校の平和学習実践について報告する。本稿では、紀要第15号の実践報告の「まとめ」の部分で今後の課題として示した、「世界を知っている18歳の育成に留まらず、世界のために主体的に行動できる18歳を育成する」という観点にもとづいて、高等学校段階で実施されている2つの取り組みについて紹介したい。中学校の3ヵ年では現在でもLHR、国語科、社会科、道徳科、美術科、各学年の研修旅行などの場面で平和学習の取り組みが続いている。その中で、平和の概念や、戦争と平和の歴史、異文化理解、構造的暴力を背景にした国際課題を学ぶ授業が展開されている。世界を知っている18歳の育成に留まらず、世界のために主体的に行動できる18歳を育成することに挑む高校での様々な取り組みは、これまで中学段階で積み重ねてきた様々な実践の先にあるものである。

2. 国際社会 (SGH)

1) 独自の学校設置科目

学校設置科目として、立命館大学進学希望者の高校3年生が所属するIRコース(International Relations、国際関係コース)で実施されている。3

単位(50分1単位)で構成され、そのうち2単位は英語教材を用いて国際社会の諸課題について英語を使って学ぶ講座。残る1単位は、SGH科目として、2017年度から、アイヌの歴史文化の理解をテーマに課題研究に取り組んでいる。北海道におけるアイヌを取り巻く諸課題の学習をとおして、多文化共生社会で生きるグローバル人材の育成を目指す実践である。

2) SGHとしての実践

SGHとは、Super Global High schoolの略称で、グローバル・リーダーを育成するための教育を通して、生徒の社会課題に対する関心と深い教養、コミュニケーション能力、問題解決力等の国際的素養を身に付け、将来、国際的に活躍できるグローバル・リーダーの育成を図ることを目的とした高等学校をさす。SGHの指定校は、各校ごとに目指すべきグローバルな人物像を設定し、国際化を進める国内外の大学を中心に、企業、国際機関等と連携を図り、グローバルな社会課題、ビジネス課題をテーマに、横断的・総合的な学習、探究的な学習を行いその成果を課題研究としてまとめる。SGHは、文部科学省が2014年からスタートした事業であり、立命館慶祥高等学校は2015年に指定を受けている。2018年度のSGH全国高校生フォーラムにおいて、本校は「アイヌの伝統を知る—教育によるアイヌ文化の伝承活動—」をテーマに全国146校の中から最優秀プレゼンテーションに送られる文部科学大

臣賞を受賞した。

3) 2017年度取り組み

2017年度は、「アイヌ文化伝承の望ましいあり方とは何か」をテーマに授業を構成した。アイヌに関する社会課題や、文化伝承の現状についてひととおり学習した後、生徒の主張は、主に二派に分かれた。ひとつは、「アイヌ文化を未来に残すために、積極的に現代化していくことが時代の要求である」として、アイヌの伝統文化をエンターテインメントや、様々な商品開発、観光資源に取り入れていくなどして、アイヌ文化を広く世に知らせていく必要性を主張するものである。もうひとつは、「アイヌ文化を残すことができるのはアイヌ自身にのみ許されるもので、多様な人間が関わり現代化をはかることは伝統文化に対する冒涇ではないか」というものである。つまり、マイノリティである先住民の伝統文化を形はどうであれ、まずは広めるべきか、時間を要しても本来の姿を守って伝えていくべきかという議論である。二派の主張の対立は1年間続き、時には「そもそも和人である私たちがアイヌの伝統文化をどうにかしようと議論していること自体、本質的ではないのではないか。逆差別にはならないか」という第3の意見とも向き合いながら授業は進んでいった。

ゲスト講師としては、アイヌ語の保存に取り組む

関根健司氏（平取町二風谷アイヌ文化博物館職員・STV ラジオアイヌ語講座講師）、創業145周年の記念事業として、百貨店の看板であるショッピングバックのリニューアルを企画し、アイヌ文様を取り入れた橋本弘昭氏（2017年度株式会社札幌丸井三越営業本部政策担当長）、行政の立場から、北海道白老町に建設中の国立博物館を中心にアイヌ文化の振興をすすめる佐藤久泰氏（内閣官房参事官）、阿部一司氏（北海道アイヌ協会）の4名の方に来校していただいた。生徒は、アイヌ文化の歴史や文化についてはもちろん、自分たちの研究課題としているアイヌ文化振興のあるべき姿について、ゲスト講師の方々と活発な議論を交わしながら、考えを深めていった。

この他、授業では広い視野でマイノリティの存在や、文化振興の在り方を学ぶために、「イスラエルとパレスチナを巡る課題」や「難民問題」「消滅危機言語（UNESCO 報告）」「南アフリカのアパルトヘイト」に関する知識を獲得する学習も行った。課題研究では、11月下旬に「アイヌ文化振興の望ましいあり方」について、個人またはグループに分かれて検討し、各自がテーマを設定した。その上で長期休暇期間を利用して、調査研究を行った。北海道内各地のアイヌ集落への取材や博物館への訪問、新千歳空港国際線ターミナル内での訪日外国人旅行者へのインタビューなど生徒の活動がダイナミックに展開された。最終の研究報告では、7つの個人やグループから企画提案があったが、どの発表も、アイヌの文化振興に果敢に挑みつつも、この1年間悩み続けてきた「望ましい伝承のあり方」を十分検討し、アイヌ文化のもつ意味と美しさに配慮した提案となっていた。

4) 2018年度取り組み

2018年度は、「消滅危機にあるアイヌ語の保存は必要か」「中高生に向けたアイヌ語の教授法を検討する」の2つをテーマに授業を構成した。授業の前半では、前年同様アイヌの歴史文化に対する理解を軸に、「ロヒンギャ難民」や「在日クルド人」に



図1 札幌丸井三越のショッピングバッグ



図2 授業の様子を伝える新聞記事
上『北海道新聞』2018年4月27日、下『読売新聞』2018年8月31日

関する話題に触れながらマイノリティと社会がどう向き合うかについて考えた。後半では前出の関根氏を招聘し、連続12回のアイヌ語学習に挑戦した。この取り組みは、高等学校が設置するアイヌ語の連続授業としては北海道初の取り組みとなり、新聞で紹介されるなど注目された。この実践は生徒自らがアイヌ語を学ぶ立場になって、消滅危機にあるアイヌ語の保存の意義について考えること、未開発の分野であるアイヌ語の教授法について考えることを目的に実施したものである。

ゲスト講師としては、アイヌ語学習を連続12回担当して下さった関根氏の他に、前年に引き続き佐藤氏（内閣官房参事官）、北方の歴史と北海道旧土人保護法に関する解説を小川正人氏（北海道博物館学芸副館長・研究部長・アイヌ民族文化研究センター長）、江別市史と樺太アイヌにまつわる歴史の解説を園部真幸氏（江別市郷土資料館学芸委員）、

現代を生きるアイヌの姿についてのお話をしてくださる結城幸司氏（アイヌアートプロジェクト）に来校していただいた。また、平取町の協力により平取小学校を訪問し、小学校の総合学習の中で実施されているアイヌ語学習の様子を視察させていただく機会も設定した。

2018年度の課題研究の成果については、本稿執筆段階（2018年12月）で2018年度の最終発表会が実施されていないため、ここで紹介することはできないが、消滅危機言語であるアイヌ語を保存しこれを学ぶ価値については、アイヌ語の学習を通じて生徒がそれぞれに理解を深め認識している。教授法については関根健司氏がアイヌ語授業で実践したいいくつかのスタイル（教材型・マオリ語教育

に用いるテアタランギ法等）を参考にしながら言語の教授法に関する調査研究を継続している。

5) まとめ

大学0回生をイメージしている立命館コースの学校設置科目であるため、授業担当教員は課題研究テーマを提示した後、基礎的な知識のレクチャーや、外部講師の招聘に注力している。生徒は、授業内外の時間を使いながら、研究課題と向き合い主体的に調査研究を行っている。SGH科目として北海道におけるアイヌ文化について取り扱うことについては、設置当初は疑問の声もあったが、グローバルな視点をローカルな視点から養っていくという価値が、現在では十分浸透している。また、そもそもアイヌを巡る諸課題自体が、北海道におけるローカルなフレームでおさまるものではなく、グローバルな視点で考えていくべき課題であるという点についても、

本授業の取り組みを通して、広くご理解していただけるようになってきている。「平和と民主主義」を教学理念に掲げる、私学立命館の特色あるカリキュラムとして、アイヌに関する課題研究が科目として成立し、そこから異文化理解やマイノリティと向きあう社会のあり方について考える機会を提供できていることに意味があると考え、今後も本校での実践を社会に発信していきたい。2020年に白老町に北海道初の国立博物館「民族共生象徴空間（愛称：ウポポイ）」ができることについては、2018年夏の内閣府の世論調査で8割を超える人が「知らない」と回答するなどアイヌ文化の振興を巡る情勢は未だ厳しいものがある。それだけに、若い世代が学ぶ姿を発信していくことが期待される。

3. 高等学校における海外研修

1) 8コースの海外研修について

海外研修は立命館慶祥高等学校のテーマである「世界に通用する18歳の育成」のために「本物にふれ本物から学ぶ」取り組みとして、高校2年生の秋に実施されている。生徒は、開発、貧困格差、気候変動、自然環境、戦争と平和構築など、地球規模の諸課題を目の当たりにすべく、タイ、マレーシア、ベトナム、北欧（ノルウェー・スウェーデン・フィンランド）、アメリカ合衆国、リトアニア・ポーランド、ガラパゴス島、ボツワナの8コースから研修先を選択している。各コース8日間の日程で研修を行うが、観光目的で参加できる研修先がないことに加えて、生徒が主体的に事前と事後の学習を行うことが伝統になっている。事前学習では、およそ4カ月前から研修先ごとに、ミーティングを行う時間が確保され、生徒が中心になって訪問先の調査や、現地での活動の事前準備が行われる。また、事後学習も同様に生徒主体で行われており、現地で学んだことをもとに、帰国後に様々な行動を起こす生徒の姿が見られている。本稿では、アフリカボツワナ共和国を訪問するコースと東欧のリトアニア・ポーランドを訪問するコースの取り組みについ



図3 北海道大学で発表する生徒の様子

て紹介する。

2) リトアニア・ポーランドコースの活動

リトアニアで「杉原記念館」「第九要塞博物館」「KGB博物館」、ポーランドでは「アウシュビッツ強制収容所」を訪問するなど戦争の歴史を目の当たりにする。特筆すべきは、戦争の悲惨さを学ぶ平和学習に加えて、「ダークツーリズム」というテーマでコース全体をまとめている点にある。つまり、戦争の歴史を学ぶことに留まらず、どう受け止めるべきかについて深める研修である。事前学習では北海道大学の協力を得て、ダークツーリズムについてのレクチャーを受け、帰国後に実施した事後学習では、研修内容のまとめと検討を行い、北海道大学で多くの関係者を集めて研究報告会を実施している。その他、事前学習では、訪問先に関する調べ学習と検討会、リトアニアで実施する Lentvaris High School との交流会に向けた準備を実施するなどしている。

3) ボツワナコースの活動

日本では珍しい高校生によるアフリカでの海外研修である。ボツワナ共和国北部の都市マウンにある Maun Secondary Senior School との生徒交流プログラムや、ボツワナ国内の国立公園での自然環境学習、現地の狩猟民族（コン・サイ族）との異文化交流などが現地で行われる。ボツワナコースは、在日ボツワナ大使館の全面協力によって実現しており、

メディア・ツーリズム研究センター高大接続プロジェクト
立命館慶祥高校報告会

ゼロからはじめる ダークツーリズム

- ①リトアニア・ポーランドコースのなりたち
- ②アウシュビッツ強制収容所とは何か
- ③ダークツーリズム関連史跡以外のリトアニア・ポーランド
- ④ダークツーリズム関連史跡を訪問した時の心の内
- ⑤ダークツーリズムのあり方、関連史跡を訪問する際の心得
- ⑥アウシュビッツと広島・沖縄・網走との比較

日程 2018年2月2日(金)
時間 14:00~16:00 来聴自由
場所 S講義棟S5 事前申込等不要

お問い合わせ
岡本亮輔 (okamoto@imc.hokudai.ac.jp)

図4 北海道大学構内に貼られた告知

現地訪問中にボツワナ政府から「自然文化親善大使」の授与を受けている。そのため生徒は帰国後に、日本人々にボツワナの自然と文化の魅力を発信するミッションを負うことになる。2017年のコース設置初年度は、事前学習としてボツワナ共和国について、テーマごとに調べ学習と検討会を行い、ボツワナジャーナルの作成と製本に挑戦した。また、青年海外協力隊OBを招いてアフリカで研修へ向けて事前レクチャー等を企画した。事後学習では、自然文化親善大使としての役目を果たすべく、札幌市内の小学校を生徒が訪問して、ボツワナの自然に関する出前授業を行った。また、札幌市円山動物園との社会連携企画として、「冬のアフリカフェア—17歳の親善大使が見たボツワナ—」と題して12月下旬に4日間の特別展示と講演会を企画した。

4) まとめ

いずれの研修コースも、現地で生徒が主体的に活動し、立命館慶祥高等学校でしか味わうことができない貴重な経験をしていることがわかる。加えて事前事後の学習が、深いテーマと探究活動、外部機関と連携した研究発表によって構成されており、生徒にとって行動力と実現力が試されるプログラムに



図5 ボツワナでの生徒討論会の様子



図6 札幌円山動物園での発表の様子

なっている。海外研修を軸にして、生徒が書籍や文献を手にとって自ら調べ、仲間と議論し、調査研究や発表の過程で様々な人と出会う。これこそが、海外研修の醍醐味ではないだろうか。

4. おわりに

本稿で紹介した、国際社会講座や海外研修の取り組みにあるように、立命館慶祥高等学校では生徒が主体的に探究活動に取り組み、社会とつながりなが

ら学ぶ姿が見られている。これらを通じて世界に通用する18歳の完成へ向けて、行動し実現していく経験を積んでいるのである。例えば、国際社会の取り組みでは、生徒が主体的に学び調査研究に打ち込み、アイヌ文化の振興という難しいテーマに向き合う様子が、たびたび新聞報道で発信されるなどして、2020年以降を見据えた北海道の多文化共生モデルを模索する多くの関係者から注目を集めている。海外研修では、本稿で紹介したボツワナコースやリトアニア・ポーランドコースの取り組みだけでなく、タイコースでは、訪問先の現地NGOとの連携プロジェクトとして、フェアトレードや日本での物資調達を実行するなどした。また、卒業生が大学進学後に学生NGOを立ち上げ現地とつながりを深めるなどしている。平和を脅かす世界の諸課題について、「知る」に留まらず、「深く学ぶ」さらにはプロジェクトを立ち上げ、「行動できる、実現できる」慶祥生が育っている。このような、立命館慶祥の高校生または卒業生の行動の根幹には、中学3年間で学んできた平和学習に関する様々な取り組みがある。中学時代に平和学習に参加して感じた様々な思いを胸に高校進学を果たし、そこで行動力と実現力を身につけて世の中とつながっていくのである。

ここで、2018年春に中学3年生を対象に実施した平和学習「核軍縮を考える」に参加したある生徒の感想文を紹介したい。約2ヵ月かけて実施した平和学習「核軍縮を考える」は、君島東彦先生（立命館大学国際関係学部教授）をはじめ、高校生平和大使としてスイスのジュネーブで核軍縮アピールをした下町舞さん（明治大学在学中）や北海道大学の協力を得て、事前学習をもとに模擬国連の形式で国際関係における核軍縮の可能性について検討し、議論したものである。

ために、担当する国以外の他国について、または自分が担当する国と他国の関係性について、とにかく知らなければ話になりませんでした。また、今回の学習をつうじて、核抑止論や核軍縮をめぐる大国の攻防など、世界の様子について多くを知ることができました。平和構築の壁になっている、対立と合意形成についても廃棄物処理ゲームや模擬国連をつうじてよく理解できました。今の私はまだまだ未熟で、この核軍縮をめぐる世界を変える力はありません。ですが、ジュネーブでアピールをした下町さんがお話されていたように、微力だけど無力じゃないという精神を大切に、自分の問題意識を行動に変えて行きたいと思います。高校でさらに学び、国際関係を学ぶと共に行動力をつけて行きます

（中学3年生生徒感想文より）

現在、立命館慶祥中学校・高等学校では、既存の中等教育のフレームにおさまらない新たな学校の価値を考え、それをかたちにすべく将来構想を議論している。今後は、そのような新たなフレームの中で、生徒の平和学習がより深い学びとなり、社会とつながり社会に影響を与えられるようなものになることを期待している。

今回の学習をつうじて、本当の意味で世の中のことを深く知ることの大切さをはじめ実感しました。模擬国連をおこなうために事前課題で実施した担当国の調査はもちろん、核軍縮に関する合意形成をはかる